

公開シンポジウム



テクノロジーは私たちに幸福にするか？ —アーレントと『スマートな悪』—

コメントに際しての視座



専門分野

・ 政治社会学 ・ 応用倫理学

研究対象

・ Human Enhancement

批判や懸念の中には、私たちの「ダメさ」を甘く見ていたり、視野狭窄であったりするものも確かにあるし、結局のところ、何を理想としているのかが不明であったり、理想をどう実現し、いかに正当化するのもかも判然としないものがある（P.9）。

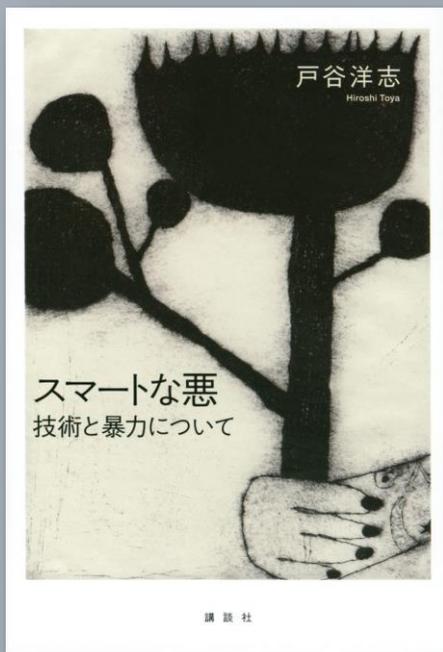
情報技術（例えばAI）を人間の価値観に合わせるだけでなく、**人間を人間の価値観に合わせるにはどうしたらよいか、それを考えねばならない**と私は思う。

コメントの流れ



- 論旨の整理
- コメントの要点
- 提案の要点
- 三つの論点をめぐって
 - スマートなテクノロジーとの関係
 - 「スマートな悪」の原因
 - スマートな悪への対案
- アーレント哲学の実装

論旨の整理



超スマート社会は、技術による苦悩からの解法を目指す、**徹底した無駄の排除を志向する社会**である。

主導理念である「スマートさ」は、**余計なものの排除**という性格を表し、**人間を受動的なもの**にしてしまう。

人間が受動的になる状況は、スマートなテクノロジーが**人間の自律的な思考を不要にする**時に顕著である。

この時、人間は単なる「歯車」と化し、責任の主体性を失い、**別様には思考できない暴力の加担者**となる。

本書では、このような状況を「**スマートな悪**」と呼ぶ。

対案の中心は、システムに従属しつつ、抵抗も可能な存在であると**自己認識を刷新**することである。

自己認識の刷新により、最適化する技術ではなく、**ガジェット性を持つ「結ぶ技術」**を目指せるようになる。

コメントの要点

- スマートなテクノロジーは、ややもすると人間を奴隷化する＝自律的に思考することを放棄させる、強い影響力（あるいは拘束力）を持つものとして理解されている。
- この理解は、一面的な理解（過度の一般化）ではないだろうか？
 - || 仮に、スマートさの本質を「余計なものの排除」と定義しても、それは人間の自律的な思考の排除に直結するものだろうか？
- 人間が能動性（思考の自律性）を発揮できなくなる事態は、スマートなテクノロジーに原因があると理解されている節がある。
- この理解はしかし、対案の検討に際して妥当な理解だろうか？
 - || 問題となる「スマートな悪」に加担するのは、人間なのか、それともテクノロジーなのか、この考察は混乱ぎみではないか。
 - || 対案においては、人間の側を免責しすぎているように思われる。

コメントの要点

■ スマートな悪への対案として、システムに従属しつつ、抵抗も可能な存在であるとの認識を新たにすべきことが示唆されている。

● この対案はしかし、現実的な効力を本当に持ちうるだろうか？

仮に、スマートなテクノロジーが、人間に悪への加担を促す環境（可能的行為を構造化する潜勢力）であるなら、つまり自律的な思考を疎外する原因なら、いかにして認識の刷新は可能なのか？

仮に、上記の環境要因が緩やかでも、その中で自力で自己認識が刷新でき、それに基づく別様な（理想的な）行動を実際にとるようになる、と期待することは妥当だろうか？

以上を要するに、テクノロジーに関して、人間に関して、そして両者の関係に関して、思弁的な考察にとどまらずに、経験的な次元を十分に考慮する必要があるのではないか？

提案の要点

- 無駄を省くスマートさを、単に結果を収斂させるものと見なさずに、結果に至るプロセスの精緻化としても捉える必要がある。
 - ▶ そもそも社会的な事柄のすべてが、私たちの自律的な思考の介在を必要とするわけではない。
 - ▶ 自律的な思考の介在が必要な事柄——これには介在の必要性を判断することも含まれる——においては、その思考のプロセスの精緻化が必要であり、そこにこそスマートさの価値がある。
- 本書のように人間とテクノロジーの「良好な関係」を、人間がテクノロジーを「奴隷化」する、いわば「主従関係」と見なさずに、「相補的な関係」と見るべきではないか。
 - ▶ 同化ではなく「結ぶ」ことが重要だとすれば、それはシステム同士ではなく、人間とシステムを「結ぶ」と考えればよいのではないだろうか。



三つの論点をめぐって

第1の論点：スマートなテクノロジーとの関係をめぐって

スマートさの本質には少なくとも次の二つの側面がある、ということだ。

- ・すなわち第一に、それが余計なものを排除するという性格を表すものであるということ、
- ・そして第二に、それによって人間が受動的になるということだ。

■上記の理解は本書の屋台骨に当たり、繰り返し提示されている。

これに関連して、人間の受動性を導くものとは、つまるところ、自律的な思考を不要にする（あるいは奪う）ことであると見なされている。

人間をそのように無力化すること自体が、機械の自己拡大がもつ環境の機械化の一環なのである。

人間がそのシステムの外部の視点から思考したり、良心に基づいて抵抗したりすることもできなくなる。

しかしながら、スマートなテクノロジーのユーザーに対する経験的な研究の成果は、上記の理解とは大きく異なる。

第一の論点：スマートなテクノロジーとの関係をめぐって

経験的な研究は、ユーザーは決してデータを盲信してはならず、データと自分の直感・感覚との間でクロスチェックと再調整を行い、両方を整合させようと試みていることを明らかにしている。⁽¹⁾

ユーザーは、スマートテクノロジーを、健康や業務管理のツールとしてだけでなく、コミュニケーションや自己物語を構築するための補助として、そして何より、抑圧的な社会規範に対する抵抗の手段としても、しばしば意味付与して。⁽²⁾

▶ 例えば、ユーザーの一人は、「自分で体重を測ることと、医者
に体重計に乗せてもらうことは同じではない」と述べている。⁽²⁾

経験的な研究は、ユーザーに見られる最大の共通点は、スマートなテクノロジーを介して、社会的な実践に対する「内省」を深めていることにあると指摘している。⁽³⁾

スマートさの本質を「余計なものの排除」と定義しても、それが人間の自律的な思考の排除に直結するかは議論の余地がある。

第2の論点：「スマートな悪」の原因をめぐって

スマートなテクノロジーは人間を様々な物とのかかわりから切断する。

悪へと加担したことは……、ある条件が整い、ある環境に陥ったとき、誰でもそうなりかねないものとして捉えられる。

■上記の理解では「スマートな悪」の原因は、テクノロジーの側にある。

しかし下記の通り、その原因を人間の側に見出すような記述も散見され、**原因の考察はいささか混乱しているように思われる。**

それは、人間がテクノロジーのシステムに自らを最適化することで、システムの「歯車」となり、責任の主体としての能力を失い、無抵抗なままに暴力に加担してしまう悪のあり方である。

スマートな悪への対案を講じる段では、人間の自己認識の刷新を示唆し、人間にはそれが可能だと考えている点で、**スマートな悪の原因はテクノロジーの側に位置づけられているようである。**

しかし、それは生身の人間の可能性を高く評価しすぎではないか？

第2の論点：「スマートな悪」の原因をめぐって

アーレントが問題視する「自分の行為に対する忘却」は、山積する社会問題の根本的な原因ではないだろうか？

「**道徳の神経科学**」は実証研究を通じて、人間の認知の歪みや道徳性向の不備、道徳的動機の不足を次々に明らかにしている。^{(4) (5) (6)}

▶ アーレントも、「現実と直面するための善き意志と善き信念」⁽⁷⁾を持ち得るのは、ナチスに立ち向かった人びとがそうであったように、「**数少ない人びと**」であることを認めている。⁽⁸⁾

そうであれば、「スマートな悪」の原因は、テクノロジーの側にあるというよりも、それに**容易く「逆適応」**⁽⁹⁾してしまう人間の側にあると見る方が良いのではないか？

懸念される事柄において、それが人間自身に起因するといえる部分がある限り、その**解決策として生身の人間に期待するのは、自分の襟首をつかんで自分を沼から引き上げることに等しくはないか。**

第3の論点：スマートな悪への対案をめぐって

本書が提案した解決策は、人間が常にシステムに帰属せざるをえない存在であることを受け入れたうえで、同時に複数のシステムへと開かれたものとして自らを理解するということであった。

ガジェット性の価値を尊重する社会において、人間はテクノロジーを結ぶ技術として活用することになるのである。

■上記の理解では「スマートな悪」の対案は、システムに従属しつつ、抵抗も可能な存在であると、人間が自己認識を刷新することにある。

しかし第一には、スマートなテクノロジーがスマートな悪の原因なら＝自律的な思考を疎外する原因なら、その環境の中で自己認識を刷新することはいかにして可能なのか、という疑問が直ちに生じる。

そして第二には、スマートな環境の拘束性が緩やかでも、その中で自力で自己認識を刷新でき、それに基づく別様な（理想的な）行動を実際にとるようになる、と期待するのは妥当だろうか（第二の論点）？

三つの論点をめぐる別様な対案の可能性

満員電車などのローカルな問題から、気候変動問題といったグローバルな問題に至るまで、多くの深刻な問題に直面している。

それらにはシステムが介在するが、問題自体やシステムを生み出すのも、解決するのも、人間の営為であることは間違いない。

▶ しかし私たちは、状況理解と行動の間で一貫性をしばしば失う。

これを念頭に、HCI（Human-Computer Interaction）の研究分野は、テクノロジーを介してユーザー自身が直面する状況の中で、行動を通じて、よりよく学ぶことに焦点をあてている。^{(10) (11)}

この場合、スマートなテクノロジーに期待される役割は、人間の意思決定プロセスに影響を与える可能性のある、利用可能な詳細情報の精緻化である。⁽¹²⁾

▶ 先述の通り、ユーザーの経験的な研究でも、データと自分の直感・感覚との交渉を通じて、社会実践に対する「内省」を深める可能性が示唆されている。

三つの論点をめぐる別様な対案の可能性

自分の直感・感覚との交渉を通じて、社会实践に対する「内省」を深める可能性は、本書で批判されるナッジにも、実は当てはまる。

通常、ナッジは「行動を変える」ことに焦点が置かれるが、繰り返しの中で、行動を変えるプロセスを反省的に捉える「経験的学習」環境として機能することが示唆されている。^{(13) (14)}

▶ 特に「経験的学習」環境を意識してデザインされた機構は「Nudge Plus」と呼ばれる。⁽¹⁵⁾

HCIの一つの焦点は、要するにテクノロジーを介した「徳性: Virtue」の涵養、つまり道徳的性格の育成（人格形成）の支援にある。⁽¹⁶⁾

「それは一言で言えば、人間が変化するということ」（『Society 5.0』）

▶ 上記のHCIの焦点では、徳育は教育理念の一つでもあるのだから、本書が指摘する「調整や共生が、強制力をもった統治によって行われる」未来につながる、とは想像しにくい。



アーレント哲学の実装

アーレント哲学の実装

本書が「緩やかな制御」・「生成変化」などを、近代的権力の肯定に終わると評するは、個々人の自律的な思考に先立つ、固定的な価値観が設定されるにすぎない、と見なすためではないだろうか。

しかし先述の通り、この見立ては大いに議論の余地がある。

上記の見立てとは反対に、個々人の自律的な思考を可能にするものとして、スマートなテクノロジーをイメージすることもできる。

▶ 実際に、そのような利用の実態や開発の動向がある。

これらを念頭に置けば、HCIの焦点は、本書が好意的に取り上げるアーレントの哲学（I am two-in-one）を、スマートなテクノロジーによって「補完」するものと見ることはできないのではないだろうか？

例えば「AMA（Artificial Moral Advisor）」の構想は、徳性の涵養という点で、こうした可能性の延長線上に位置づけられる。^{(17) (18)}

▶ 「認識的パターンリズム」⁽¹⁹⁾としての政治的徳の陶冶。^{(20) (21)}

アーレント哲学の実装

本書で重視される「思考」は、自己内対話の「プロセス」である。

- ▶ わたしは一者のなかの二者 (I am two-in-one) なのであり、そこでわたしはこの自己と調和したりできなかつたりする。⁽²²⁾

しかし先述の通り、社会的・技術的環境と人間本性の脆弱性によって、自助的に、この「プロセス」を持つことは容易ではない。

この点において、HCIの徳倫理的アプローチのように、データダブルを善用する道筋（例えば、先述のAMA構想）は魅力的に思える。

- ▶ 既存のスマートなテクノロジーは事実上、行為者が、行動の道徳的な理由を学習する（認知的訓練）手助けもしている。⁽²³⁾
- ▶ AMAは、ユーザーの「データダブル」であるペルソナ（自己）ゆえに、「ユーザー（わたし）」との対話によって、「ソクラテス的徳」の獲得を促すものとして理解できるのでは？

以上を要するに、システム同士ではなく、人間とシステムを「結ぶ」という方向が、自律的な思考の重視ではむしろ有効なのではないだろうか？

Thank you for listening.

For references



[ここをクリック \(URL\)](#)

スライド中の () は参考文献番号に対応